冒険者かく語りき　～トレジャーハンター修行中～

小坂みかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
冒険者かく語りき　～トレジャーハンター修行中～

【Ｎコード】
Ｎ８９４３Ｙ

【作者名】
小坂みかん

【あらすじ】
玉藻＆土鍋ご飯さんのＷｉｚａｒｄｒｙ　Ｏｎｌｉｎｅのリプレイ小説「冒険者かく語りき」の外伝です。
キャラ設定の部分等で創作しているところはもちろんありますが、今のところ、小噺含めほぼ完全リプレイです。
キャラクター間での会話内容や挙動については、あまり創作しておりません！

つまるところ、物語仕立てのプレイ日記でございます。

それなのに、それとなーくドラマが見え隠れする不思議。

想像というスパイスをふんだんにふりかけまくらなくても意外とオイシくなるのは、ＭＭＯの醍醐味ってやつなんでしょうね。

あ、完全創作する際は前書きのところに「創作です」と書きますね！

土鍋ご飯さんと同居している私。

ＰＣが一台しかないため、私のハル君と土鍋ご飯さんのミューちゃんやイナンナさんが一緒に冒険するのはいつになることやら…。

←うちの姉貴分こと馬鹿角の小説はこちら←
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ４１８２ｙ／

←リリアさんが書く外伝はこちら←
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ７３６１ｙ／

※Ｗｉｚａｒｄｒｙ　Ｏｎｌｉｎｅはｇａｍｅ　ｐｏｔさんの提供する基本プレイ料金無料のＭＭＯです。

※この作品はｐｉｘｉｖでもお読み頂けます。

＊用語辞典＊　（最終更新日：２０１１／１１／２８）（前書き）

このゲームをプレイしたことがない人のための用語辞典です。

リプレイ小説化するにあたってゲーム内の表記等と変えているものもあったり、私の独自の解釈のものもあるので「これが全て正解」ではないです。

もちろん、読み飛ばしＯＫですし、本編の方でも説明を入れさせて頂いていますので「そんなの必要ねえよ！」という方は「回れ右」して２話目よりお楽しみください。

＊用語辞典＊　（最終更新日：２０１１／１１／２８）

【レベルについて】

冒険者には２つのレベルがある。

・冒険者レベル

肉体の成長度合いを表す。レベルが上がるとＨＰとＭＰが増える。力強さや素早さ、運などのパラメータは確実に上がるというわけではなく、上がらない事もあれば逆に下がるということもある。

・ソウルランク

魂の成長度合いを表す。ランクがあがると冒険者レベルの上限が解放されたり、挑戦可能なダンジョンが増えたり、更には装備出来るものの種類が増えたり装備品を強化したり出来るようになる。

【冒険者証】

冒険者レベルやソウルランク、あとどの程度でレベルが上がるかなどの指標だけでなく、冒険者個人の属性や、冒険を通して獲得した称号、現在の自分の装備についてや「どんなものに自分は耐性を持っているか」なども確認出来てしまう優れ物。なんと、体調管理も行えるぞ！

【称号】

一定レベル何かをすると授けられるもの。冒険者としてのステータスの一部。種類は色々とあるらしい。

【属性（アライメント）】

何かしらの職業に就くにあたって必要となってくる「個人の人柄を表したもの」的なもの。３種類ある。

・秩序（Ｌａｗｆｕｌ）

簡単に言うと「真性の良い人」。ただし、自分の正義を貫くタイプなので、必ずしも善人ではない。

・中立（Ｎｅｕｔｒａｌ）

物事には白黒だけではなく灰色もあるという事を分かっている人。悪く言うと「どっちつかず」。ごくごく普通の人。

・混沌（Ｃｈａｏｓ）

良くも悪くも個性的。単なる腹黒のドジっ子から真性の悪まで幅広い。でも、だからといって必ずしも悪人というわけではない。

【スキルツリー】

職業別に覚えられる技を系統立ててまとめたもの。ギルドから支給されている。冒険者レベルが上がるとスキルを覚えるためのポイントが与えられるので、このスキルツリーを見ながら「何を覚えようかなあ」と悩むのも冒険者の楽しみのひとつ。ちなみにポイントを取っておいて後で使うということも出来るので、覚えたい技が覚えられるようになるレベルになるまでポイントを貯めておくのもあり。

【種族について】

・エルフ

耳が長く、美男美女が多い。ナルシストでプライドも高い。体力は低い。向いている職業は魔法系や芸術系。

・ノーム

おっとりとした口調で信仰心も高い。力強さもそれなり。小柄。角が生えてて、耳が少しばかり尖り気味。角はヤギ角みたいな感じで、個体差がある。ちなみに、角を引っこ抜かれると死ぬらしく、大昔に人間に乱獲されたそうです…。

【職業について】

・戦士（ファイター）

戦いの最前線に出て、剣や斧、槍などで戦う人。

・盗賊（シーフ）

罠を解除したり、お宝の匂いを嗅ぎつけたり。必ずしも犯罪者というわけではなく、トレジャーハンター的な意味合いの人が多い。

・僧侶（プリースト）

支援や回復系の魔法が得意。…と、思いきや、戦士の次にブロッカーとして活躍する頑張り屋さんな職業。

【その他】

・ギルド

冒険者にお仕事（依頼・ミッション）を与えてくれる、ありがたいところ。たまに試供品なんかもくれる。

・パーティー

ダンジョンやミッションを効率よく攻略するために冒険者同士が一時的に仲間になった状態。

・ユニオン

パーティー活動などを通して気が合った仲間が集まって作った集団。同盟とか、労組みたいなもの。ユニオンに所属していると、今後何かいいことがあるかも…？

冒険開始から、初めての罠解除成功まで（前書き）

本日（２０１１／１１／２６）、初めて罠解除に成功致しました。あまりの嬉しさを記念して、土鍋ご飯さんに倣ってリプレイを書いてみました。キャラクター設定の部分はもちろん創作ですが、プレイ中の心情はほとんど素です。

冒険開始から、初めての罠解除成功まで

「男エルフで盗賊？何か、やっらしーい！宝箱なんかはクールに軽々罠解除しちゃって、女の子には『君の瞳は宝石のように美しい』とか言っちゃって、お宝も女の子も選り取り見取りってわけ？」

「はん。馬鹿馬鹿しい。女なんかよりも、本物の宝石の方が百万倍も美しいね。俺はね、俺のようにうっつくしーい宝石様にお目にかかりたいだけなの」

「うわ、出た。ナルシスト発言。あんた、そんなんじゃあ、いつまで経っても独り身よ？」

「うるせえな、放っとけよ」

ハルはかつて姉貴分とした、そんな会話を思い出しながらガックリと肩を落とし、深いため息を吐いた。そして背中にたかる虫を払いのけながら急いで立ち上がると、安全な場所へと移動しながら荷物を漁り、回復薬を煽るように飲み干した。

「ああ、くそ！また毒針食らっちまったよ！ムカつくな！！」

思いがけずそう叫び、いまだ追ってくる虫へ八つ当たりのように薬瓶を投げつけると、彼は街へと戻るための梯子めがけて走り出したのだった。

＊＊＊＊＊＊

街に戻ってくると、ハルは荷物の中を覗き込み、顔をしかめさせた。戦利品は僅かな回復薬と石と、雀の涙ほどの端金。あとは装備が出来るかどうかも分からない靴がいくつかと杖だ。どうせ靴は自分の職業では装備出来ないもののはずだし、石はキラキラと綺麗に光り輝いてはいたが、所詮はただの石である。宝石にはほど遠い。この石を大量に集めると宝箱の鍵を作って貰えるなどという噂も聞きはしたし、実際にそれらしい宝箱も目にしたのだが、自分の財布の中身を考えると銭に変えてしまった方が良さそうだった。彼は「…靴と一緒に、石も売っちまおう」と心の中でごちると、杖に目をやった。宝箱の罠解除に失敗して毒を受けつつも、何とか手にした杖だ。良いものであって欲しい。ただ、この前石つぶてを食らいながら手にした杖は、ささくれだってボロボロに朽ち果てた二束三文にもなるかどうかのものだった。今日手に入れた杖も同じように汚らしい。…いつまで見つめていても、金にはなってくれない。今度こそ、良いものでありますようにという思いを胸に、彼は道具屋へと歩き出した。

「ああ！やっぱり今回もショボかった！こんなんじゃあ、いつまで経っても装備整えらんねえよ！！」

道具屋で靴と杖を鑑定してもらったのだが、やはり自分が装備出来ない靴と、この前と同じ杖だった。道具屋で売っている武器や装

備は、いまだに宿にすら泊った事がなければ酒場を利用した事もない自分には到底出せない価格だった。以前、姉貴分が「露店販売を覗いてみなさいよ。結構安くていいものがあることがあるわよ」を言っていたが、この街に集まってきている冒険者は、もうかなりの手練となっているのか、露店にも彼のレベルで装備出来るようなものは売っていない。「このままじゃあ、本当にいつまで経っても装備が整えられないから、もっと経験値も金も稼げる依頼を受けようにも受けられないし、レベルも上げられない」と彼がうなだれていると、タイミング良く郵便が届いた。姉貴分からの小包だった。

戦士をやっている姉貴分は良い仲間と巡り会ったようで、仲間達と着々と冒険者レベルを上げていた。そのため、どんどんと低レベルの装備が要らなくなるようで、姉貴分は装備が要らなくなる度に彼に合うサイズに手直しをして送りつけて来た。たまに「最初のダンジョンで盗賊が装備出来るモノ、ゲットするの大変でしょう？」と言って、わざわざ露店をチェックして見つけて来てくれもする。姉貴分に頼りきりなのは情けないと思いつつも、正直大変ありがたかった。ハルは装備中の「毒を受けにくくなる」という小汚い皮鎧を脱いで届いたばかりのローブを着込むと、再びダンジョンへと潜ったのだった。

＊＊＊＊＊＊

姉貴分からのありがたい施しのおかげで防御力も上がり、ギルドから討伐を依頼されている盗賊団の下っ端も何とか苦労することなく倒せるようになってきた。倒した敵の持ち物を物色してみると、

鎧を手に入れることが出来た。街に戻り鑑定をしてもらってみると、以前姉貴分からお下がりで貰ったものと同じ「毒を受けにくくなる」という皮鎧だった。既に持っている物ではあったが、自分で手に入れたということが何とも感慨深かった。

不用品を売り払った金が貯まり、ようやく剣だけではあるがギルドから配給される初級冒険者用の剣から卒業することが出来た。これで攻撃力も少しは上がる。ハルは心なしか顔をほころばせると、再びダンジョンへと戻っていった。

＊＊＊＊＊＊

もう少し虫退治で経験値を稼ごうと思っていたにも関わらず、ダンジョンの入口付近でお目当ての虫に出会う事は滅多になかった。もう少し、奥に行きたい。そう思っていた矢先に姉貴分からまたもや小包が届いた。結構見た目の良い皮鎧と、暗器と呼ばれる、いわゆる「ナックル」だった。暗器は両手に装備するため防御が出来ない分、身軽に動けるので攻撃の手数が増える。これなら「決戦場」と呼ばれる力試しの場もクリアして、ダンジョンの更に奥へと進めるようになるのでは。そうと決まれば、途中で放棄していた「決戦場へと続く道を拓くための仕掛けの攻略」を再開させよう。ハルはそう思い立つと、まだ押していない四つ目のボタンのある部屋へと向かった。

しかし、思うように行かない。ボタンのある部屋に辿り着く前に、盗賊頭に殺される。何度挑んでも殺される。初心者には神の加護が

あり確実に蘇生出来るとはいえ、死ぬというのはやはり気分のいいものではない。この前レベルが3になった時に盗賊業には重要な運の数値が一つ下がった。こんなにポコポコと死ぬのは、運がないからなのだろうか。そんなことを考えていると、ふとレベルが上がった時に授けられるポイントについて思い出した。新しく技を覚えたり、既に覚えている技を強化するにはこのポイントを消費する必要がある。もう少し高レベルになったら割り振ろうと取ってあったポイントを使って、何とか今抱えている問題をクリア出来はしないだろうか。そう思ってギルドから渡されていた「スキルツリー」なるものを広げて見てみると、既に覚えることが可能な技の一つに「ステルス」というものがあった。何でも、一定時間姿をくらませた状態になれるらしい。

「何だよ、あるじゃん！！」

ハルは思わずそう声を上げると、恥ずかしそうに頬をほのかに赤らめさせた。冒険者たる者、常に注意を払えと姉貴分が口癖のように言っていたのを思い出したのだ。彼はそそくさと「ステルス」を覚えると、スキルツリーを荷物にしまい込んで四つ目のボタンを攻略しに向かったのだった。

＊＊＊＊＊＊

何とか決戦場への道を拓き、その決戦場もクリアしてレベルが4

になった。ダンジョンの更に奥へと進めるようになると、盗賊団の一味の追剥ぎ男に遭遇するようになった。こいつを五人片付けると結構な経験値と金が貰える。虫も奥の方がよく湧いた。おかげ様で、レベル３から４へと上がる時よりも楽に５へと上がることが出来た。

レベルが５に上がってすぐのことだった。ダンジョン内をうろうろとしていると特殊な鍵が施されているわけでもなさそうな未開封の宝箱を発見した。…今日こそは、宝箱の罠解除を成功させたい。そう思って宝箱の前にひざまづくと、追剥ぎ男に見つかった。

「宝箱！宝箱に集中させろよ！うっとおしい！！」

目の前の折角のお宝が他の冒険者に持って行かれるところを想像して苛々としながら追剥ぎ男を殴り倒すと、ハルはいそいそと宝箱の前へと戻った。この前はどんな罠か見定めは出来ていたものの、罠を解除出来たという手ごたえが低く、ままよとばかりに鍵を回してみたら案の定失敗した。その前はどんな罠か見定めている間に罠が作動してしまって失敗した。だから、慎重に、慎重に…。動悸が激しくなり、呼吸が荒くなるのを抑えながら見定めを続けていると、今までに感じた事もないような手ごたえが得られた。

（これなら、いけるか…？）

はやる気持ちを抑えつつ、ゆっくりと宝箱の鍵を回す。カチリという聞いたことのない音が鳴り響き、罠が作動することなく宝箱は開いたのだった。ぱっくりと開かれた宝箱をハルは束の間見つめる

と「開いたー！！」と叫びながら宝箱の中を覗き込んだ。

「うわ！うそ！開いた！罠が作動せずに開いたよ！！なんか、ようやくシーフを名乗れる気がするよ！うっわー！五つも物が入ってる！すっげー！！！！」

彼は大はしゃぎしながらいそいそと宝箱の中身を荷物へとしまい込むと、あともう少しでミッション達成となる追剥ぎ男の討伐と虫退治を手早く終わらせ、意気揚々と街へと帰っていった。

＊＊＊＊＊＊

ルンルン気分で街へと戻ってきた彼を待っていたのは幸福な気持ちではなく、落胆だった。鑑定の結果、宝箱に入っていたのは例の毒に強い小汚い皮鎧と、壊れた剣と盾、装備品に装着させると体力が微量に増えるという不思議な石、それから毒消しの薬だった。体力増加の不思議な石は試供品でギルドから貰える物の方が質がいい。だから正直、売りとばした方が嬉しい気分になれる。まあ、冒険なんてそんなもの。そのうち挑戦できるダンジョンも増えて、もっといいものも手に入るさと肩を落としていた彼は姉貴分からの手紙を読んで更に機嫌が悪くなった。

冒険者には冒険者としてのレベルの他に魂の成長度合いを表した「ソウルランク」というものがある。手紙によると、姉貴分は既にソウルランクが４になったとのことだった。レベルがどんどん引き離されるのはまだいいとして。癪にさわるのは「カイ」だかという仲間の戦士だ。どうやら姉貴分は蘇生に失敗して灰になった際にこの戦士に助けられ、それ以来、彼のことが気になっているらしい。

今までは自分を心配してくれ気遣ってくれる内容だったのだが、今となっては大半がカイがどうしただのこうしただのという内容で埋められた手紙を思わずクシャリと握りつぶすと「だから、カイって誰だよ！」とハルは叫んだ。

一番盗みたかったアメジストを、見知らぬ戦士に奪われかけている。冒険者としての道のりはまだ遠く長い盗賊の目の前に、大きな難問がまた一つ立ち塞がったのだった。

冒険開始から、初めての罠解除成功まで（後書き）

…最近、土鍋ご飯さんが目の前で「カイさんが」「カイさんが」言う度に、本当にイラッと来るようになってきました。ちくしょう、出来ることなら、人狩りしてやりたい…。でも、私は良い子なので、犯罪には手を染めないんだもん！ふーんだ！！はあ、カイさんなんて気にしないで、自分のペースでゆっくりレベル上げようっと…。

小噺　数値とユニオン（前書き）

２０１１／１１／２７

もう寝ようと思い、土鍋ご飯さんにＰＣを明け渡したら、ハル君的には事件と呼べることが起こりました。なんか、寝付けなくなってしまったので、何となく投稿します。ちなみに、数値関連についてはネタバレを含みますので、まだ最初のダンジョンをクリアしてない人は「回れ右」をお願い致します。

小噺　数値とユニオン

ハルは街に戻ってくると、何とはなしに財布にしまってあった冒険者証を眺め、思わず「え！？」と声を上げた。レベル４から５に上がるのは案外楽だったのにも関わらず、５から６に上がるためには現在蓄積されている経験値の倍は稼がないといけないということが冒険者証の指標には表示されていた。

「えー…うそ、あと２２００って、追剥ぎ男で換算したら２２回分？ダンジョンうろうろしてたらアッと言う間に貯まるかなあ？」

そのように呟きつつ眉間に皺を寄せながら冒険者証と睨めっこしていると、彼はある数値が変動していることに気がついた。自己の属性を表す表示のところの「秩序」の項目が若干ながら増えていたのである。

属性というのは何かしらの職業に就く際などにも関係する、いわゆる自己の「人柄」のようなもので、三種類に分けられる。「秩序」と「中立」と「混沌」だ。秩序は分かりやすく言うと「真性のイイ人」で、中立は「世の中には白黒だけではなく、灰色というものも存在するということが分かっている」という、まあどちらかというと普通の人、そして混沌は「良くも悪くも個性的」とでも言おうか。ちなみにハルの属性は中立で、姉貴分は混沌だ。姉貴分とよく行動を共にしているというリリアというプリーストも姉貴分と同じく混沌属性だと聞いたことがある。姉貴分から聞いた限りの彼女はとてもおっちょこちょいで、ほぼ全ての罠に引っ掛かり、ドジを踏んだのを可愛らしい笑顔で誤魔化す割には腹黒いらしい。姉貴分もしっ

かりしているようでかなり抜けているところがあるのを思い出したハルは「混沌属性って、もしかしてドジの別名？」と首を傾げた。

そのようなわけで各々「属性」というものを持ち、それも冒険者レベルと一緒に記載されているのだが、ハルの冒険者証には今まで０と記載されていた「秩序」の欄が１０となっていたのだ。そして１００だったはずの「中立」も１１０に増えている。

（俺、何かしたっけなあ…？）

宙に視線を投げながら今までの冒険を思い返してみたハルは、あることを思い出した。ダンジョンの中で二度ほど、ギルド以外の依頼を受けた事があったのだ。そして、その依頼を達成した際に依頼主に質問をされ、何とはなしに返事をしたことがあった。大切にしていた人形を落としてしまったという男の代わりに人形を探してきた時には、その人形が本当に大切にされていて、彼にとっては珠玉の宝石のようなのだろうというのが伝わってきた。だから「その人形、あんたに愛されてるな」と笑って人形を手渡してやった。また、暗闇でペンダントを落としたという男の代わりにペンダントを探してきた時には、「暗闇の方が落ち着くよね？」と聞かれて「日向も暗闇も好きだけど」と答えた。暗闇にはここそこに危険も潜んでいるが、ひっそりとお宝が眠っていることもある。そして陽の下では、姉貴分が愛する農作物が煌めき輝いている。だから暗闇も日向も、本当にどちらも好きだったから、そう答えた。どちらの回答がどのように数値の変動をもたらしたのかは分からなかったが、そのくらいしか変動の理由は思い当たらなかった。まあ別に、このくらいの変動じゃあ何かに影響が出るということもないしと思いながら冒険者証を財布にしまうと、ちょうどまた姉貴分からの郵便が届い

た。今日は小包ではなく、手紙だけだった。

手紙によると、姉貴分はパーティーの仲間と「ユニオン」と呼ばれるものを作ったらしい。パーティーとはまた違う、ギルドの依頼を効率よく攻略するために気の合う仲間で集まった「同盟」のようなものだという。ユニオンを作るにあたって登録料として三万という大金が必要になるそうなのだが、姉貴分はうっかりとんでもない名前で登録を行ってしまい、慌てて登録破棄したということだった。うっかりミスで大金を失いうなだれていると、いつものメンバーがやってきて一緒に資金調達をし直してくれたそうで、なんとか無事にユニオンを立ち上げることが出来たそうだ。ユニオン名は「アザルスの風」というそうだ。この大陸を股にかけ、風のようにさすらい、冒険者として名を上げようという彼女達にはぴったりの名前だった。「よかったら、ハルも入る？」と誘ってくれたのは嬉しかったのだが、ユニオンに入るには直接ユニオンのメンバーと面会しなければならないらしい。姉貴分とは常にすれ違いで手紙でしかやりとりが出来ず、姉貴分の仲間達の顔も知らないハルは大いに悩んだ。そんな状態では入ろうにも、入れないではないか。どうやって姉貴分と顔を合わせようかと思案しながら手紙を読み進めていた彼は、思わず顔をしかめて手紙をクシャリと握りしめた。そもそも、ユニオンを作ったのは「今日もカイと会えるかと思ったら、彼、一向に街に顔を出さなくて。ユニオンを作っておけば専用の掲示板も使えるから、『いつなら一緒にダンジョンに行けるよ』っていうやり取りもしやすくなるし」という理由らしかった。

「だから、カイって、誰なんだよ！！！」

思わずハルはそう叫ぶと、必死に辺りを見回した。どれだ。どれ

がカイってやつだ。この街に身を寄せているのは間違いないから、もしかしたらすぐ近くにいるかもしれない。レベル的に十中八九返り討ちになることは間違いないが、それでも一発殴ってやりたい。

見知らぬ戦士を探す事を諦めたハルは不機嫌そうに鼻からフンと強く息を吐くと、姉貴分からの手紙を荒々しく荷物へと突っ込み、便箋を取り出した。そして「ユニオンに勧誘してくれるのはありがたいけど、それなら顔出せ。馬鹿角」とだけ殴り書くと、封筒に彼女がよく利用しているという宿屋の住所を書き、郵便屋に叩きつけるように手渡した。

小噺　数値とユニオン（後書き）

…というわけで、ユニオンに誘われました。ちなみに、「ユニオン作る！」と言いだした時に土鍋ご飯さんが言っていた「ユニオンを作る理由」ですが、本当に本分の通りのことを言ってやがりました。どんんだけ「カイさん」なんだよ。あ、加入するためにも、ネカフェに行くしかないのかしらん…。

小噺その２　リリアとの遭遇とユニオン加入（前書き）

２０１１／１１／２７

おかげ様で無事にユニオンに加入出来ました。リリアさんを見付けられて本当によかった。ネカフェる手間が省けました。ありがとう！

小噺その2　リリアとの遭遇とユニオン加入

たまには露店でも覗いてみるかとハルが街中をぶらついていると、プリーストのノーム娘が露店を開いていた。聞き覚えのあるユニオン名のネームプレートを付けていたのでもしやと思い声をかけてみると、彼女が噂の「ドジっ子リリア」だった。いつも姉貴分がお世話になっていますと声をかけると、向こうもこちらのことを話で聞いていたのか、明るい笑顔で返事を返してくれた。

何とはなしにそのまま彼女の隣に腰を落ち着かせて世間話をしていたのだが、姉貴分から聞いていたのとは随分と違って、リリアはとても優しくて素敵な女性だった。…ただ、時折「ウヒ」などと裏に何かを含んでいるような怪しい笑い方をする不思議な人でもあった。やはり、混沌属性というのはとても個性的のようだ。彼女は本当に優しくて、「よかったらレベル上げ、手伝いましょうか？」と言ってくれた。あまりにもレベルが離れ過ぎているので付き合わせてしまうのも申し訳ないという思いと、もう少し自力で頑張りたいという思いから「気持ちだけで嬉しいよ。気遣い、本当にありがとう」と返した。いつか姉貴分と三人でどこかに冒険に行けたらきっと楽しいだろうと考えていると、彼女がクスクスと笑いながら「やだ、何見てるんです？惚れちゃ駄目よ？」と言ってきた。

「惚れないよ！」

「えー」

「えー…って何さ」

「いいえ？」

本当に彼女は面白い人で、もっと仲良くなりたいと思っていると向こうの方から「友達になろう」と声をかけて来てくれた。ちょうど自分も同じことを言おうとしていただけに、心なしかドキッとした。

彼女はユニオンの方にも誘ってくれ、慣れない手つきで紹介状を作成してくれた。

「はい、これでウチのユニオンのメンバーですよ。ようこそ！」

「あ、ありがとうございます！本当に、いつも姉貴分がお世話になっています」

「いえいえー、お世話してますー」

「そこは普通『こちらこそ、お世話になってます』じゃないの？」

笑いながらリリアにそう返すと、彼女はクスクスと笑いだした。…何だよ、姉貴分から聞いていたのとは全然違って、本当に楽しくていい人じゃないか。そのままつらつらとまた他愛のない会話をして、冒険者がよく陥る「金欠病」から「良い装備を手に入れるには」というような話になった。宝箱さえ開けられたら、レア物も結構手に入るからお財布も暖かくなるのにと頬を膨らますリリアを眺めていて、ふと、先日の冒険でリリアの宝箱の解錠率がパーフェクトだったという話を聞いていたことを思い出した。

「ちゃんと宝箱、開けられてるじゃん。俺なんて、昨日ようやく初めて解錠に成功した駄目シーフだよ」

「ふふ、神様のご加護ですよー」

胸を張って得意げに笑うリリアは「レベルが上がればそれだけ冒険もし易くなるし、特殊任務を受けたらどう？」とアドバイスをしてくれた。期間限定でしか受けられない特殊な任務は金も経験値もオイシイらしい。彼女は折角開いていた露店を畳むと「こっちへ来て」と言って特殊任務を受注できる場所へと案内してくれた。任務の内容を見てみると、今の自分にはかなり骨が折れそうな内容だった。とりあえず、もう少しレベルを上げてから挑んでみようか。そんなことを考えていると、隣にいたリリアがこちらを見上げて「頑張ってね！」と笑いかけてくれた。見上げられて初めて、彼女がとても小柄だということに気がついた。

「今並んでみて気付いたんだけど、ノームってすごく小柄」

「そうなんですー」

「ハグしたら、ジャストにスッポリ腕の中に収まりそう」

ただ単に「小柄である」ということの感想としてそう言ったのに、彼女は「きゃーセクハラ！」と言いだした。慌てて「え、何で！？」とハルが声を上げると、彼女はクスクスと笑うばかりだった。

「可愛いねって話だよ！？」

「あら」

「何」

「いえ、レベル上げ、頑張ってねー」

笑い続ける彼女が本当に可愛らしくて。不覚にも、思わず「本当にハグしたい」と思ってしまった。正直、姉貴分よりも可愛げがある。どうして姉貴分はこんな素敵な人のことを「腹黒」だと言うのだろう？こっちの気も知らないで「カイさんが」「カイさんが」と言ってくるお前の方がよっぽど鬼畜だよ。

ハルはリリアに別れを告げると、いつもの下水道へと戻っていった。

いつかきっと、姉貴分や彼女と冒険に出たいから。とりあえず今日も追剥ぎ男退治を頑張ろう。

小噺その2　リリアとの遭遇とユニオン加入（後書き）

ちなみに、彼女との会話文はほとんど原文ママです。ハル君が本文内で彼女に対して思ったことも結構リアル。ほ…本当にハグしたいって思っちゃったんだよね…。だって、モーションとか巧みに使って、本当に可愛らしく笑うんだもん。なんだろ、感情移入し過ぎ？これ、ロストしたら立ち直れなくなりそうで怖いわ。

えっと、とりあえず、私は危ない人ではないし、ノーマルだし、ちゃんと三次元に土鍋ご飯さんという伴侶がいるということを念押ししておきますねっ！？

レベル6になるまで（前書き）

２０１１／１１／２８

次のレベルで成長限界なので、早く下水道をクリアしなきゃです。
頑張るぞー！！

レベル6になるまで

リリアにユニオンへ加入するための手続きをしてもらった後、ハルは彼女達に追い付きたいと意気込んで下水道へと戻っていった。今日は運に恵まれているのか、いつもよりも宝箱に遭遇することが多かった。動悸がするのを抑えつつ罠の見定めを行っている途中で、彼は強い衝撃と視界が白むのを感じた。ふと気がつくと彼は静寂の世界に包まれており、足元には自分の死体が転がっていた。…罠の爆弾が見定め途中で爆発したのである。

「え、うっそ！マジかよ！！」

彼は慌てて蘇生の行える守護者像へと走った。罠解除に失敗した宝箱とはいえ、中には何かしらが入っている。命を失ってまで開けた宝箱の中身を他のヤツに持って行かれては堪ったものではない。彼は生き返ると、今度は先ほど自分が死んだ場所へと急いで引き返した。

「宝箱！宝箱の中身は！？……よかった！あるよ！！」

ホッと胸を撫で下ろし、急いで中身を荷物へとしまい込むと追剥ぎ男がやってきた。何度か追剥ぎ男と戦っていると、再び宝箱に遭遇した。今度こそ、慎重に、慎重に。そう思いつつハルは見定めを行い、そして絶叫し、走りだした。

「はあ！？マジふざけんな！！また爆発するってどういうことだよ！！！」

なんと二度目の宝箱も罠解除失敗で、またもや死んでしまったのである。先ほどと同じように急いで生き返って戻り宝箱の中身が無事であることに胸を撫で下ろし、三度目の正直とばかりに挑んだ宝箱も途中で罠が作動し、石つぶてを食らってしまった。…昨日の解除成功はまぐれだったのだろうか？うなだれつつも四度目の宝箱に挑む中、ハルはあることに気付いて見定めのための技を使い分けるタイミングや順序を変えてみた。すると、どうであろう。すんなりと罠解除に成功したのだった。そしてその後も二つ宝箱を開けたのだが、そのどちらも罠解除に成功出来た。

（やっぱり、焦ったら駄目だな。落ち着けば、ちゃんと出来るんじゃん、俺！）

自分の成長に喜びつつ宝箱の中身をしまっていると、脚甲という今まで手にした事のない装備品を得ることが出来た。もしかして、自分の装備出来るものか？そう期待しつつ街に戻り鑑定を依頼してみると、なんと装備可能なものだった。しかも、脚甲装備はギルドから支給されていた初心者用の装備品をいまだに使用していたので、今回手に入れた物の方が防御力が高い。

（は…初めて、自分で「今身に着けている物以上の装備品」を手に入れられた…）

ハルは心の中でそう呟くと、目頭が若干熱くなるのを感じたのだった。

＊＊＊＊＊＊

再びダンジョンと街との往復を繰り返していると、財布の中の冒険者証が何やら音を立てたような気がした。追剥ぎ男の討伐依頼を達成し終えたということをダンジョン内にいるギルドの職員に報告しに行った際に、再び依頼をこなしに戻る前にふと立ち止まって「さっきの音はなんだったのだろう？」と冒険者証を取り出してみた。すると、今までの行いの中の何かが一定レベルをクリアしたようで、獲得称号の欄に一つ称号が増えていたようだった。何が増えたのだろう？と首を捻ってしげしげと冒険者証を眺めていた彼は思わず「え！？」と声を上げた。増えていた称号は「小金持ちの冒険者」だった。その称号は、いつの間にか冒険中に稼いだ銭の累計が一定数値を超えていたということを表していた。赤貧にあえいでいた彼にとって、それは心なしか心躍るものだった。

（どうしよう。貯めておいた金を使って、装備を新しくしようか。でも、この先レベルが上がってきたら、露店で中古を買うか、ダンジョン内で自力でゲットするかするしかなくなってくるんだもんな。今からあまり、使いたくはねえなあ…）

目を白黒とさせながら思案していた彼は、何かを思いつき「そうだ！」と声を上げた。

「折角だから、宿屋に泊まってみよう！そのくらいの贅沢は許されるよな！！」

ちょうど体力も減っていて幾分か疲れている気もするしということで、ハルは次に街に戻った際に宿屋へと足を運んだ。姉貴分が口癖のように「いつかロイヤルスイートに泊ってみたい」と言っていたのを思い出して宿泊費用を見てみると、なんと３０００ゴールドもした。ただ、高費用な分やはり至れり尽くせりのようで、体力・魔力が完全回復する上に、体調がどのくらい優れているかを最高２００％という数値で表したものが冒険者証に表示されるのだが、それが１６０％まで回復できるらしい。そんなに疲労回復の効果があるなら、確かにいつかは泊ってみたいと思いつつ、他の部屋の料金表を見ていたハルはあるものに目ざとく気がついた。料金無料の「馬小屋」の上に、ソウルランク２までの冒険者限定ルームの案内が記載されていたのである。そして、思わず驚きの声を上げてしまったのだった。

「え、これ、間違いじゃなくて？ロイヤルスイートとほとんど同じ効果なのに、１００ゴールドで本当にいいんですか！？」

「いいコンディションの方が戦闘も楽になるから、レベル上げも苦じゃなくなるだろう？ギルドとしても新米冒険者には早く若葉マークを卒業してもらいたいんだとさ。お兄さん、１００くらいならも

う気軽に払えるくらいにはなってるなら、利用して損はないと思うよ？」

「いやいや、損どころか！泊ります、泊ります！！」

たった１００ゴールドさえ払えば体力・魔力が完全回復する上に体調が１５０％まで回復出来るなら、そりゃ喜んで払います。払わせて頂きますとも。追剥ぎ男のミッションは達成すると２５０ゴールド貰えるから、そのくらいだったら財布も痛まない。本当にありがたい。ハルは満面の笑みでしばらくぶりの布団に寝転ぶと、久々に泥のように眠ったのだった。

＊＊＊＊＊＊

体調がいいと、やはり戦闘中のキレもいい気がした。これなら、レベル６もすぐさまな気がする。ハルは勢い込んで追剥ぎ男を追いかけ回した。そしてレベル６に上がるために必要な経験値を稼ぐと、街に戻って宿に泊った。

目が覚めて、チェックアウトの際に女将さんが「レベルアップおめでとう。次のレベルまではあとこのくらいですよ」と教えてくれた。そして、レベルが上がったことによってどのように数値が変動したかを確かめるために、動悸がするのを抑えつつ冒険者証を取り出した彼は「はあ！？」と怒りにまかせて絶叫し、目の前の女将を驚かせた。

「なんで、また運が下がるんだよ！運のないシーフって、どんなだよ！！」

「お兄さん、きっと次は良いことがあるから、気にしなさんな」

「いや、良いことって！運が下がったのに！？」

まあ、冒険なんて、そんなもの。ハルは諦めのため息を吐くと、女将に「また来ます」と挨拶して宿屋を後にしたのだった。

レベル6になるまで（後書き）

……2回爆弾で死んだ時と、ＳＲ2までの冒険者限定部屋の効果を見た際と、そしてＬＵＫがまた1下がった時はリアルに叫びました…。

小噺その３　カイとのプチ遭遇（前書き）

２０１１／１１／２８

レベル６になるちょっと前に、とうとうカイさんとチャット上でですが遭遇致しました。

後の方で、結局カイさんと顔を合わせたかのようなシーンが出てきますが、その時には既に私はＰＣを土鍋ご飯さんに引き渡していたので、私とカイさんとの遭遇は本当に前半のチャットで会話したのみです。

いつか、お会いした（キャラクターを並ばせた）状態でお話してみたいです。

とりあえず、チャットについては専用の通信機器があって、インカムを付けてやり取りしているというような扱いとさせてくださいませ。

この世界に機械があるかどうかは分からないがな…！

小噺その3　カイとのプチ遭遇

もう少しでレベル6になると勢い込みハルが街と下水道を往復していると、ユニオン専用の通信機器が音を立てた。誰が話しているのだろうと通信機を耳に装着しながら道具屋や鍛冶屋の前をうろうろとしていると、男の声で「こんばんはー」と聞こえてきた。別の男が「あ、カイさん、初めまして」と挨拶しているのが聞こえ、ハルも思わず「初めまして。よろしくお願いします」と礼儀正しく挨拶をした。こいつが例の戦士か…などという思いよりも先に「あ、ちゃんと挨拶しなきゃ！」ということのほうが真っ先に脳裏をよぎった結果だった。カイともう一人のユニオン員、そしてリリアが盛り上がっているのに耳を傾けていると、カイが「ハルさんは？」と尋ねてきた。彼らが先ほどまで「ここに行こうよ」と盛り上がっていたダンジョンは自分のレベルではもちろん行くことが出来ない。ハルは折角誘ってくれたのに申し訳ないと思いつつ「まだ、下水から出れないんです」と口を開いた。

「え、ソロでやってるの？」

「はい。冒険に慣れたいので、自分のペースでゆったりまったりと」

「なるほどー。ハルさんとも、一緒に行きたかったなあ」

「ありがとうございます。下水をクリアしたら、是非ご一緒させて下さい」

「はーい」

顔を合わせての会話ではなかったが、カイがとても良い人そうであるということを感じることは出来た。少し釈然としない部分もあるが、あの馬鹿角が吊り橋効果というだけで気になっているというわけでもなさそうだというのが分かり、心なしかホッとした。

再びユニオン員達の会話に耳を傾けていると、リリアとカイが連れだって結構なレベルのダンジョンに行こうかという話をしていた。今日はたまたま姉貴分がすぐ近くにいたハルが「だったら、姉貴分を呼んで来ましょうか？」と彼らに声をかけると、急にカイが「だまされたーーーー！！」と叫び出した。あまりの声の大きさに、顔をしかめて耳に着けていた機械を離しつつ「騙された？」とハルが返すと、カイは「あ、ごめん、こっちの話」と慌てた声を出した。…なんか、この人も結構面白可笑しいな。あの馬鹿角に、実はぴったりなんじゃないか？そう思いつつ「じゃあ、あいつをそちらに行かせますから」と返事を返し、通信機未装着でまったりとしていた姉貴分に「カイさん達が呼んでるよ」と声をかけた。

＊＊＊＊＊

姉貴分にくっついて、彼らの待ち合わせの場所へとやってくると、リリアが素手でパンチを中空に繰り出していた。姉貴分はいつも攻撃の際に「ほい！」という少々間抜けな声を出しながら斧を振るう。それはもう「お前、斧じゃなくて、もう愛用のクワで戦えば？」と言いたくなるような感じなのだが。それとは対照的に、リリアはとても可愛らしい鈴の音のような声でパンチを繰り出していた。どう

して同じノームなのにここまで差があるのだろうか。あまりの可愛らしさに思わず「リリアさん、可愛い」と呟くと、隣にいた姉貴分が顔をニヤつかせた。

「ねえ、リリア。今、ハルがね、リリアのこと可愛いってニヤニ…」

「ニヤニヤはしてねえだろ！？」

慌てて姉貴分を小突いて口止めすると、姉貴分は「なんで私がはたかれなきゃいけないのよ…」と頬を膨らませた。そのやり取りを聞いていたカイが「また嫉妬を生む発言を…」を苦笑していたのだが、誰が誰に嫉妬するのだろう？とハルは首を傾げさせた。それを見ていたリリアがクスクスと笑った。

彼らは本当に面白くて良い人達だ。一緒にいて、こんなにも楽しい気分になれるとは。彼らに出会えてよかったと思う。そして早く、そんな彼らと一緒にダンジョンに潜れるようになりたい。ダンジョンへと向かっていく彼らの背中を見送ると、ハルも思いを新たに下水へと戻って行ったのだった。

小噺その3　カイとのプチ遭遇（後書き）

どうやらカイさんは私が「私をログアウトさせて、姉貴分へと変わりましょうか？」と声かけをした際に、ハル君の中の人が私ではなく土鍋ご飯さんだと勘違いした模様です。

あと、姉貴分が彼らと合流した際にハル君もそこにいたような感じで書きましたが、前書きにも記載しました通り、実際にはおりません。自宅からのインだったため。ただ、チャット上と、隣にいた土鍋ご飯さんとのリアルな会話にて本当にこんな感じの内容の会話してました。そして、土鍋を殴りつけたのも事実です。わざわざ報告するなよ、恥ずかしい。

でも、同じ種族なのに何パターンか声があるんですねえ。知らなかった。キャラクターエディットの時に声まではたしか聞けなかったはずなので、ソロでやってると気付かないですよ、これ。

ソウルランク2になるまで（前書き）

２０１１／１１／２８　ソウルランクがようやく2になりました。
今回はかなりネタバレを含みますので、まだ下水をクリアしていない人は「回れ右」でお願いします。

ソウルランク2になるまで

レベルも6になったことだし、そろそろもう少し奥に進んでみようかということで、ハルは以前ペンダントを探すためにうろうろした場所よりも先に進むことにした。いつも追剥ぎ男狩りを行っている場所にある扉を開け、奥へ奥へと進んで行くと図体のデカい敵と遭遇した。狂気に見染められ、血に飢えた木こりだった。以前、ここを通り抜ける際にハルはこいつに殺された事があった。あの時は力の差が激し過ぎてなぶり殺しもいいところで、どうしてもダンジョンの偵察を行いたかった彼はステルスを使用して木こりの背後を幾度となく駆け抜けたものだった。今度は勝てるだろうか？彼は恐る恐る木こりの背後に近付き渾身の一撃を食らわすと、そこはかとない手ごたえを感じた。…これなら、倒せる！自信が湧いてくると力も湧いてくるような気がして、ハルはそのまま一気にたたみ掛け、狂気の木こりを打ち倒した。心なしか不安で揺らいでいたダンジョンの奥へと進む決心が固まった瞬間だった。

奥へと進んでみると、何か装置が隠されていそうな窪みを見つけて手を差し入れてみた。すると、ただ手がすすけて汚れただけだった。この先にはこの間決戦場へと行くために攻略した仕掛けのようなものは、もう何もないのだろうか？そう思って歩を進めていると、案の定それらしいものはあった。これは、討伐依頼のあった盗賊団のボスが潜む場所へと続く道を拓くためのものなのだろうか？それとも、また決戦場があるのだろうか？とりあえず、その場にあったアイテムを失敬し、他にも何かないか探りながら歩を進めていると、やはり同じような石の台を見つけることが出来た。先ほどの台に置かれていたアイテムとは別のものが、そこには鎮座していた。それも失敬して更に奥へと進むと、ここに至るまでに失敬した二つのアイテムを嵌め込めるような装置を発見した。以前決戦場へと進む道

を拓いた際に作動させた装置と見た目が一緒だった。ただ、この装置には説明書のようなものが取り付けられており、それを眺めながらハルは眉間に皺を寄せた。

「はあ？虫取り？ホウ酸団子とか、そんなのの機械版かあ？」

とりあえず起動させてみようとアイテムを嵌めこみ装置を起動させると、案の定決戦場へと飛ばされたのだが。

「き、きき、気持ちわりい…！！」

辺り一帯虫、虫、虫…。今までに見た事もない量の虫が湧いていて、思わずハルは呻いた。大量の虫がこちらめがけて群がってくるのは、本当に気持ちが悪かった。ひいひいと嫌悪の叫びを上げながら虫を蹴散らすと、更に奥へと進むための道が拓かれた。

＊＊＊＊＊＊

奥へと進んでみると、下水道が広がっていた。今まで「下水道」という名前のダンジョンなのに、一体どこに下水道があるのだろう？と思っていたのだが、ようやくその「下水道」へと到達できたのだ。奥へ奥へと進んでみると、今まで見た事もないような罠がここ

そこに仕掛けられていた。それらを掻い潜りつつ、とりあえず最奥を目指してみる。その途中で何やら怪しい窪みを見つけた。手を差し入れてみると、死者の紋章が刻まれた鍵を手に入れることが出来た。一緒にメッセージも見付かったのだが、そこには「彼女は生きている」と書かれていた。死者が生を語るとは、何とも奥深い。それとも、このメッセージには文字面通りの意味とは別の何かが内に秘められているのだろうか？

手にした鍵を荷物へとしまい込んで更に奥へと進むと、「この先に盗賊団がいます」という注意書きのなされた装置を発見した。ここがどうやら、ギルドからの依頼で討伐を行わなくてはいけない盗賊団の本拠地らしかった。ただ、その場所へと行くには装置を作動させなくてはならないらしく、その装置というのもネジが抜かれて使えなくなっていた。

「ていうか、この広い下水道の中から三つもネジを探せって、とんだ嫌がらせだな…」

そう呟きながら来た道を引き返しつつ、ハルは「じゃあ、中にいる盗賊団達はどうやって出入りしてるのだろう？閉じ込められたっきりでは飢え死にするだろうから、こんな依頼も発生しないだろうし」と首を傾げさせた。

下水道へと戻り、ガラクタの山を探していると紫色の瘴気を纏った魔物に遭遇した。腕に覚えがないものは戦わない方がいいということを聞いてはいたが、確かに、実際に目にしてみるとただならぬ寒気と嫌悪感しか感じなかった。もしかしたらこの先にガラクタの山があるかもしれない。ステルスを使って通りぬけようかと考えて

いると、件の魔物がこちらに気付いたようだった。このまま何事もなく去っていってくれとハルが心の中で祈っていると、ヤツがこちらめがけて走り出した。

（やばい、確実に殺される…！）

血の気がサーッと引いて行くのを感じながら、ハルは慌てて魔物に背を向け走り出したのだが、あまりの恐怖で足がもつれるのか、走る速度をあげることが出来なかった。それでも何とか魔物を振り切り、ヤツのいた場所を避けて探索を続けたのだが、先に見付けていたガラクタの山以外にそれらしいものは見付けられなかった。やはり、あの魔物のいた先に一つあるようだ。胃の腑が重くなるのを感じながら例の場所へと戻ると、彼は早速ステルスを使用して魔物の背後を駆け抜けた。ハルはこのスキルを覚えておいて本当によかったと心底思った。戦士の姉貴分がレベル１２に上がった際にこの魔物に挑んでみたそうなのだが、防御力を上げに上げ、更にしっかりと防御を行っていたにも関わらず、盾が盾としての機能をすることなく瞬殺されたと言っていた。自分の倍ものレベルで、しかも戦士職の者が紙くず同然に散るほどの強さなのだ。触れたくないどころか、目にしたくもなかった。本当に怖すぎる。

あまりの恐怖で目眩を起こしつつ、ステルスの効果が切れる前にヤツの背後を通り抜けて辺りを見回してみると、やはりガラクタの山はあった。これでネジが二つ揃った。だがしかし、もう一つのネジは一体どこにあるのだろうか？散々見て回ったが、それらしいものはこれ以上、もうないし。とりあえず一旦下水の入口へと戻ってみよう。そう思いながら歩を進めていると、やはり入口付近にガラクタの山はあった。下水の奥へと進む際に、陸橋のようにせり上が

った細い道を通って奥に進んでいたため、気付かなかった。最初からこちらを通っていればよかったな。ネジを拾い上げ、空いた手で後頭部をわしわしと掻きながら溜息を一つ吐くと、ハルは再び下水の奥へと戻って行ったのだった。

＊＊＊＊＊

装置の修理も行ったことだし、これでアジトに踏み込むことも可能となった。だがしかし、今の自分のレベルで、果たして一人で討伐出来るだろうか？誰かとパーティーを組んだ方がいいだろうか？ハルは悩みながら、ダンジョンの入口付近へと繋がる穴を見上げた。あの穴から入口付近へと戻るのは容易だが、再びここまでやってくるのは少々骨が折れる。まだ神の加護が効いていて死んでも確実に蘇生出来る事だし、一か八か試してみようか。彼は意を決すると、装置を作動させてアジトへと踏み込んだのだった。

暗器を装着し、ゆっくりゆっくり奥へと足を進めると、盗賊団の一味の数名がこちらに気付いて襲いかかって来た。可能な限り攻撃を避けつつ応戦していると、意外とあっさり三人倒す事が出来た。回復薬を飲み、他に敵はいないかと奥に進んでみると、自分と同じくらいの背丈の男が一人いた。そいつとやりあっていると、視界にちらりと何やら巨大なものが映り込んだ。応戦の手を緩めずに視線だけ動かしてみると、身体を少々仰け反らせて見上げなければ顔が見えない程の背丈の男がそこにいた。

（こんなの、一人で倒せるのか…！？）

やはり誰かしらとパーティーを組んだ方がよかったかと少々後悔の色を滲ませながら敵から距離を取り、回復薬を煽るように飲み干して瓶を投げ捨てると、ハルは鬨の声を上げて大男に突っ込んだ。

最悪死亡するかと思っていたのだが、意外とすんなり打ち倒す事が出来た。他にも敵はいないかと辺りを見回してみたものの、今倒した男二人が最後の敵のようだった。クエストを達成し、下水を一通りは制覇したという実感が持てないまま、ハルは入口付近へと繋がる穴を飛び降りて、下水を後にしたのだった。

＊＊＊＊＊＊

街へと戻り、ギルドへ報告を済ませると次の依頼を受けるべく「魔法省へ行け」と言われた。「正直、あんたにクリア出来るとは思わなかったよ」と言いつつも冒険者として成長した自分を嬉しそうに眺めるギルド員から褒美と魔法省への紹介状を受け取ると、ハルは早速魔法省へと行ってみることにした。

ギルドを出たところで、不思議な女と遭遇した。どうやら、自分と同じエルフ族のようだった。彼女は「あなたに是非ソウルについて話したいことがあるから、どうか寺院を尋ねて来て欲しい」と言ってきた。もしかして、ソウルランクが上がる時がとうとう自分にもやって来たということなのだろうか？魔法省も気になったのだが、

この女の言葉も気になったハルは、先に寺院へ行くことにした。

よくおいで下さいましたと歓迎の言葉を述べた女は、ソウルについてつらつらと説明をしてくれた。そして「あなたは既に次のソウルランクへと上がるための経験を積まれていますね」と微笑んだ。女が言うには冒険者レベルを7よりも上に上げるにはソウルランクを上げる必要があるらしい。だったら、レベルが7になるまで待とうか？でも、ソウルランクが上がれば装備可能なものが増えることだし。思い悩んだ末に、ハルはソウルランクを上げてもらうための儀式を受けることにした。

「おめでとうございます。これであなたは、ソウルランクが2になりましたよ」

祝福の言葉を述べた女がクスクスと笑いだしたので、どうしたのだろうとハルが首を傾げさせると、彼女は彼の頬に触れながら「神の御加護があるといいですね」と微笑んだ。彼が驚いて身を後ろへと引くと、彼女はジェスチュアで彼の頬に涙が伝っていることを示した。それは、ギルドからの依頼をようやく終えた際には感じなかった何かが、ソウルランクが上がったことでとめどなく溢れだした結果だった。

ようやく、冒険者として一回り成長出来た。感慨深さも一入（ひとしお）で、

ものすごい満足感もあった。それと同時に、そこはかとない恐怖心も芽生えた。この先からは初級冒険者に与えられる加護はもうない。死ねば蘇生に失敗する可能性も出てくるし、人狩りに狙われ、持ち物を略奪される恐れも発生する。より一層気を引き締めて動かねば。

しかしながら、死を恐れていては冒険なんて出来ない。だからといって、生きる喜びを忘れては、冒険を通じて心身ともに成長をすることも出来ない。「メメント・モリ。…いつか必ず死はやってくる。だからこそ、今ある生を大いに楽しめ」とはよく言ったものだ。ハルは奥歯をグッと噛みしめると、神の加護を信じ、冒険者としてより一層成長し、そして再びここへ戻ってくることを彼女に誓ったのだった。

ソウルランク2になるまで（後書き）

本気泣きはしませんでしたが、泣きかけはしました。本当に、感慨もひとしお。

とりあえず、次はのんびりとカオカ回ろうと思います。

この子がロストなんてしたら、私、本当に立ち直れないかも。だから、もし死んだら蘇生率１００％で蘇生させる事を徹底しようと思います。

ちなみに、ダッシュ出来なかったのは左Ｓｈｉｆｔキーを押さなくてはいけないのを、間違って右Ｓｈｉｆｔを押してたからのようです。てへ。

小噺その４　いいこと、ありました（前書き）

２０１１／１１／２８　心なしか良いことがありました。この前ＬＵＫ下がったのに。

小噺その４　いいこと、ありました

下水クリアのために奥へと進もうと意気込んだハルは、狂気の木こり男を倒した先で追剥ぎ男を倒した。ヤツの持ち物を物色すると、何やら道具を手に入れた。今まで、何かしらの道具を手に入れたことなどなかった彼は「何だろう、コレ。罠作成道具か何かかなあ？」と首を捻った。

そこから少し奥へと進んだところで、普段見掛けない虫を見かけた。ダンジョンの入口付近でも何度か見かけ倒してみようと追いかけたことがあったのだが、いつも退治する虫と比べると動きが早く、いまだ倒したことのない虫だった。ここならそうそう逃げられないだろうし、倒してみよう。何かアイテムを頂戴することは出来るかな？と思い攻撃を仕掛けたのだが、やはりちょこまかと逃げられた。何とか追いかけながら倒してみると、何と、５００ゴールドを手に入れることが出来た。

「何だよ、この虫…。追剥ぎ男なんて多くても１５ゴールドくらいしか持ってねえのに。なんで人より金持ちなんだよ！」

普段一度に手にすることのない大金を得た嬉しさよりも、「人より金持ち」という事実に何となく悲しくなった。追剥ぎ男だってきっと盗賊団の一員として、一生懸命働いているだろうに。そいつらよりも金持ちだなんて。でもまあ、かなりの臨時収入が入った気分だ。嬉しいことには変わりない。

＊＊＊＊＊＊

一度街へと戻って先ほど入手した「道具」とやらを鑑定してもらったところ、何とそれは「アイテムポーチ」だった。冒険者用の鞄には四つまでこのポーチを取り付けることが出来る。ポーチがついていればそれだけ持てる荷物の量が増えるので、あると大変助かるものなのだ。

姉貴分からお下がりを二つ貰っていたので、これでポーチが三つになった。ギルドから依頼されている下水に潜む盗賊団の一掃を完了すれば、褒美の一つとしてアイテムポーチが貰えるそうなので、それも数に入れれば取り付けられる最大数のポーチを持っていることとなる。大変ありがたい。

今日は臨時収入も入ったし、ポーチも一つ入手した。良いこと尽くめだ。今度宿屋に泊ったら、女将さんに「ちゃんと良いこと、ありました」と報告しよう。そう思いながら姉貴分宛ての近況報告の手紙をしたためると、物理的に不可能なのではないかというような速度で返事が返ってきた。何か緊急の用でもあるのかと慌てて封を切り、中身を確認したハルはほっこりとした気分を心なしか削ぎ落された。

「アイテムポーチを敵から入手する確率はホントにホントに低くて、私だってまだ貰ってないのに！あんた、この前、ＬＵＫが下がったって言ってたけど、ＬＵＫと引き換えに拾ったんじゃないの、それ？」

…言ってろよ、馬鹿角。これはね、頑張ってる俺に神様が与えてくれたご褒美なの。断じてＬＵＫと引き換えに貰ったものじゃないの。そんなに悔しかったらお前も盗賊に転職して、敵からのアイテム入手率が上がるスキルでも身につければ？

数値なんて、ただの目安。本当に運がいいかどうかなんて、それは神のみぞ知ること。冒険なんて、本当にそんなものさ。ハルは手紙を荷物にしまい込むと、「今度会ったら、入手したポーチを振りかざしてリアルラックの良さを見せつけてやろう」と笑ったのだった。

小噺その４　いいこと、ありました（後書き）

ＬＵＫと引き換えなんじゃん？…とは言われませんでしたが、普通に驚かれました。

とある夫婦の悲愛歌（前書き）

２０１１／１１／２９～１２／０３

ネタバレ必至のため、タイトル見てピンとこない方、ピンと来てもまだ攻略していない方は「回れ右」でお願いします。

とある夫婦の悲愛歌

ダンジョンと街の特定の店を行ったり来たりするだけの生活を長らく行っていたハルは、ちょっと他の場所も見て回ろうかと思い立ち、久々にのんびりと街中を散策をすることにした。そして酒場の前を通りかかると、エルフ族の女性が店の中をちらちらと覗きながら苛々としていた。彼女は怒ったような哀しいような顔をしていたので、どうしたのかと思い声をかけてみると、ヒューマン族の浮気夫がここから出てくるのを待っているのだという。話を聞いてみると、彼女は夫のことを「普通の男だ」と言いつつも本当に心から愛しているようで、ハルはとてもいたたまれない気持ちになった。

彼女も言っていたが、エルフ族が他種族と結婚するのは本来ならば有り得ないくらい困難で、なんとか結婚出来たとしても祝福はされないし、仮に離縁しようものなら「ほら、上手くいかないと言っただろう。だから、戻っておいで」なんていう優しい言葉をかけてもらえるなんてことも有り得ない。この結婚が上手く続かなければ、彼女は本当に一人ぼっちになってしまうのだ。プライド高い種族故のことなのだが、それを圧してでも彼女は他種族と結婚したのだ。夫の方もそれを理解しているだろうに、どうして浮気なんてするのだろうか。本当に彼女が可哀想だ。ハルが「大変だな。気持ち、分かるよ」と返してやると、彼女は「何とか夫の愛を取り戻したい。そのために愛の秘薬を作りたいので、材料を取ってきては貰えないだろうか？」と頼んできた。彼は二つ返事で承諾すると、とりあえず酒場の中へと入って行ったのだった。

＊＊＊＊＊＊

「うう、一時間半腹が膨れる量の飯で２００かあ…。最近の稼ぎから考えたら食えない事もないけど、でもなあ…。宿屋の二倍だろ…？」

顔をしかめさせながらメニューを眺めていたハルは悩んだ末に亭主に「とりあえず、今日は店の中だけちょろっと見させてよ」と言うと、店内の雰囲気を冷やかして帰ることにした。二階に上がってみるとぐでぐでに酔っぱらった男が絡んできた。どうやら彼が先ほど依頼を受けた女性の夫のようで、彼は「付き合うならエルフ。結婚するならノームだよなあ。あいつがあんなにキツい性格だったなんて…」というようなことを愚痴りだした。

（ちょっと待て。エルフ族がプライド高いのは知ってるはずだろうが。そのエルフ族が他種族と結婚しただけでもすごいことだし、それってそれだけすっげえ愛されてるってことなんだぞ？この男、分かってて言ってんのか？マジで殴ってやりてえ）

ハルがそんなことを思いながらこめかみに血管を浮き立たせていると、彼は「とあるブローチさえあれば、きっとしおらしくなるから手に入れたいのだが」というようなことを言いだした。結局彼も妻のことを愛していて、何とかこの状況を打破したいと思っているようだった。

（なんだ、浮気してるって聞いてたけど、別にそういうわけじゃないんだ…？）

聞くところによると、そのブローチがある場所は先ほど妻の方から依頼された薬の材料がある場所と同じ所にあるのだという。ついでだし、頼まれてやるかと思い承諾して、早速その場所へと向かおうと階段を降りようとしたハルは、ノームの店員がこちらを見ていることに気が付いた。話しかけてみたのだが、こちらの言う事はまるで耳に入っていないというかのような感じで彼女はため息をつき、そして「何で、あんな人に恋をしちゃったんだろう」と言いつつも例の酔っ払いを恍惚とした表情で見つめるではないか。

（えっと…彼女が一方的に恋してるのか？でも「結婚するならノーム」とかほざいてたし。…どちらにしても、殴ってやりてえな、あの男）

ハルは深くため息をつくと、今度こそ酒場を後にした。それにしても…

（アイテムに頼るんじゃなくて、殴り合い覚悟で本心を話し合えばいいのになあ。奥さんの方だって、結婚するためにプライドかなぐり捨ててるわけだから、そのくらい出来るだろうし。旦那の方だって、そこまで惚れ込んでるんだったら、逃げずに思ってる事を打ち明けろよ）

夫婦って、難しいな。まあ、結婚も一種の「冒険」だもんなあ。難しいに決まってる。そんな事を考えながらハルは再度深いため息をつくと、遺跡へと向かったのだった。

＊＊＊＊＊＊

初めて赴く遺跡は冒険者レベル5以上推奨らしいのだが、ハルには正直少し辛かった。何度か死に、色々と初めての体験をしたのだが、それはまた後日語ることとして。

薬の材料の方もブローチの方も成仏できずに遺跡に縛られている亡霊が所持している物で、それぞれ「欲しければ今から出すお題の答えに当たる該当者について、墓を見て確認してこい」と言われた。何日かかけてゆっくりと遺跡の奥へ奥へと進みながら一つ一つ墓に刻まれた名前と死亡理由を確認し、亡霊の元へと戻って答えを伝えた。薬の材料の方で調べてこなければならなかった人の死因については、このお題をクリアした日にうっかり書き留めておいたメモを街へと置き忘れてしまっていたため、答える際に少し苦労をした。ブローチの方はお題クリアの日に調べた墓の人物がたまたま該当の人物だったため、すんなりと答えることが出来た。これで依頼を達成出来る。ハルは安堵したものの、それぞれの品を依頼人達に渡すのは出来ることならしたくないと思った。それというのも。薬の材料の方は、そのままであれば「ただの水」。しかしながら、魔法の薬として調合して服用すれば効果が絶大過ぎて副作用があるという。以前その薬を飲んだ男は命を削ってしまったらしい。そして、ブローチのほうも持ち主であった恋患いで亡くなったという女性の怨念が篭っているのか、一度(ひとたび)女性が装着すればきっと命を落とすだろう

ということだった。

（本心をぶつけ合えば済む話なのに、こんな簡単に互いの命を削る必要はあるのか…？）

ギルドから繰り返し受注できる依頼ならともかく、こういう依頼は受けた以上絶対に反故には出来ない。でも、彼らのためにも、出来るならば反故にしたい。ハルは心がずっしりと重たくなるのを感じながら街へと戻った。

＊＊＊＊＊

妻のほうに報告をすると、彼女はその場で薬を作った。彼女は「この薬をいやでも飲ませてみせる」と意気込んでいた。「私達夫婦はきっと上手くいきますよね？」と心配そうに問いかけてくる彼女に、何て返したらいいか迷ったハルは頬をひきつらせて無理矢理笑顔を作ると「きっと上手くいくよ」と答えた。「上手くいったところで、そんなのは薬の力だろ」とか「もしかしたらそれで旦那さんが死ぬかもしれないから、上手くいったとしても、それが結果的に本当にいいかは分からない」とか、本当は色々と思う事はあった。でも、副作用は出ないかもしれないし、何より、必死な彼女が本当に可哀想でならなかった。だから、「上手くいくよ」としか言えなかった。

しかし、笑顔で「頑張ります」と言う彼女と別れてから、ハルはそう答えたことをひどく後悔した。以前、ギルド以外から依頼を受

けた際に属性を表すところの数値に変動があったのを思い出して何とはなしに冒険者証を見てみると、０だった混沌の数値が４０に増えていたのだ。「上手くいくよ」という答えは多分、間違いだ。きっと、薬を服用した後に副作用が出て、何らかの悪いことが起きるのだろう。そして、それは最悪「死」という結末をもたらすのだ。「頑張る」と言って笑えるのなら、その気持ちをバネにして、薬を使わずにもう一度やりあってみなよ。今度はいきなり喧々囂々（けんけんごうごう）としないでさ。…もう一度、そう言葉をかけてやりたかったのだが、それも今となっては叶わない。彼女は本当に夫を愛しているんです。それに、人は必ず道を踏み外すし、それを悔い改めることだってあるんだ。だからどうか、神様、彼女から夫を奪うことだけはしないで下さい。ハルは心の中で切にそう願いながら、夫の元へと向かったのだった。

夫にも報告をしブローチを渡してやると、彼は「これであいつは俺の心を折らない良い妻になるはずだ」と喜んだ。あんたの妻は元々良い妻なんじゃねえの？じゃなかったら、あんただってさっさと離縁してノーム娘に乗り換えてるだろ。そう言ってやりたかったが、とりあえず「そのブローチは呪われている」とだけ伝えた。すると夫は「あいつが淑女になってさえくれれば、呪われてたって構わない」と言いだした。…あんた、愛する妻に呪いの品をプレゼントするのかよと思いながら、ハルは本気で殴ってやろうかと考えた。

ハルはまだ自分では呪いの品を装備したことはないのだが、聞くところによると、呪われたものというのは破損して砕け散るまでは決してその身から外す事は出来ないのだという。ということは、もしこのブローチが本当に呪われていた場合、彼女はずっと身につけ続けることとなる。そして、冒険者ではない彼女の身に着けるブローチは戦いなどで傷つくこともないから、きっとすぐさまは壊れない。それでは、本当に彼女が衰弱死してしまうかもしれないではな

いか。それではあまりにもあんまりすぎる。ハルは、彼らの事を思うとやるせなくてしかたがないという思いに駆られた。そして、苦しくて、重い。こんなことなら、始めから依頼を受けなければよかったかもしれないとまで思った。

＊＊＊＊＊＊

彼らの依頼を達成したことによって大量の経験値を得ることが出来、レベルが8に上がった。しかし、レベルが上がっても嬉しい気分には何となくなれなかった。レベルアップで気持ちが上がらないのは初めてだった。そしてハルは気分が落ちたまま上がらないどころか、冒険者であるが故にこういうことにも巻き込まれるのなら、正直、冒険者をやめたいかもしれないとまで思った。

冒険者をやめたいと思うだなんて、もちろん初めてのことだった。冒険者へは、まだ見ぬお宝に出会うために数々の危険を乗り越える「男のロマン」に憧れてなった。だから、こんな思いをすることは望んではいなかった。しかし、こういうことも冒険者として成長するための壁なのだ。そしてそれは冒険者としてだけでなく、人として成長するための壁でもある。だからきっと、嫌でも越えていかねばならないものなのだ。人としての人生という冒険がそうであるのだから、冒険者としての冒険だって、そんなものなのだ。納得は出来ないが、納得しよう。それにしても。実は、彼ら二人に「このアイテムが悩みを解消してくれる」とアドバイスをした男がいるらしく、それがどうやら同一人物のようなのだ。彼らが口にしていた「仮面をつけた怪しい男」というのは、一体どのような人物なのだろ

うか？あんな物騒なアイテムを「お悩み解消のための便利品」という感じで紹介するような男なのだから、きっとろくでもないやつなのだろう。きっとこの街のどこかにいるだろうから、今度探してみようか。

ハルが宿を後にして空を見上げると、そこにはいつも通りの晴れやかな青空と、燦々と輝く太陽があった。神様、どうか。あの夫婦が、薬の力や呪いに打ち勝てますように。そして、彼ら二人を死が、呪いや副作用が原因ではない死が分かつその時まで、彼らが幸せでいられますように。二人がいつまでも、この綺麗な青空を一緒に見上げて、太陽のぬくもりを感じて笑っていられますように。ハルは輝く太陽に向かってそのように祈ると、ため息を一つつき、伏し目がちに視線を落としてダンジョンへと戻って行ったのだった。

とある夫婦の悲愛歌（後書き）

クエストにまつわるお話って、人によって解釈は様々とは思いますが、私はこのクエスト、切なくて堪らなかったです。本気で「ああ、こんなことに巻き込まれなければならないのなら、冒険者やめたいかも…」とちょっぴりですが思っちゃいました。でも、「冒険なんて、そんなもの」なんですよねえ。

死神との初遭遇（前書き）

２０１１／１１／３０

カオカで初めてウォーカーと遭遇しました…。超怖かった…。

死神との初遭遇

とある夫婦からの依頼を消化するべく、初めて遺跡へと赴いた時のことだった。一応、自分の冒険者レベルはこのダンジョンを攻略するための適正レベルではあるとのことだったのだが、入ってすぐのところの食虫植物と虫にかなり手を焼かされた。ヤツらは意外と強く、囲まれるとあっという間に体力を削られてしまう。今の自分では防御の出来ない暗器で戦うのは少々無理があったのか、ハルは一度死んでしまったのだった。

彼はソウルランクが上がってから初めての死に動揺した。何故ならば、ソウルランクが2に上がっているから、蘇生に失敗する恐れがあるからだ。以前姉貴分が「魂の天秤のジャッジを受ける時に、蘇生率が９５％の時は何も捧げずに蘇生しちゃうかなあ、私は。だって、いきなりロストするわけじゃないし」と言っていたのだが、とてもじゃない。いくらすぐさま消失するわけでなく、その間に「灰になる」というワンクッションがあるとしても、その「灰になる」という状態を想像するだけでもハルはゾッとした。…天秤に捧げ物をして、蘇生率を１００％に絶対してから蘇生しよう。そう思ったハルは守護者像の前で持ち物の確認を行った。魂は肉体を置き去りにしてきた場所から離れてはいるのだが、まだ魂と肉体とを繋ぐ何かが途切れていないからなのか、肉体が所持している物の確認は容易だった。…鞄の中にはこの前下水道で稼いできた回復薬が結構入っている。これを捧げ物にしよう。彼は魂の天秤への捧げ物として回復薬を一つ指定したのだが、それでも蘇生率１００％にはまだならない。捧げ物は最大五つまで可能だったので、もう一つ回復薬を捧げてみると、ようやく１００％となった。

（うわ…これ、捧げられる物を持ってなかったり、蘇生率が低くなってたらアウトじゃね？超怖いんですけど…）

生き返った瞬間、安堵よりも恐怖でため息が漏れた。入口のすぐ近くだったから良かったものの、これがダンジョンの奥深くで死亡したらどうなってしまうのだろう？聞いた話によると、魂の状態でいると死神が寄ってきて魂を刈り取って行くのだという。刈り取られ砕かれた魂では蘇生率はもちろん下がるし、折角守護者像へと歩を進めていても自分の死体のある場所へと連れ戻され、蘇生への旅路をやり直さねばならないらしい。

（絶対にお目にかかりたくねえし、捕まりたくねえな…）

出来る限り、死なないように気をつけよう。ハルは気を引き締め直すと、再びダンジョン入ってすぐのところへと戻って行ったのだった。

＊＊＊＊＊＊

ガードの出来る盾と短剣に持ち替えて虫や植物を薙いでいると宝箱に遭遇した。さっきの今で死にたくないハルは慎重に見定めを行いたかったのだが、虫や植物は湧くのが早く、見定め中に攻撃を食らい始めた。意を決してままよとばかりに鍵を回すと罠が発動し、

あろうことかその罠は爆弾で、彼は再び死後の世界へと降り立つ羽目となった。

そんなことがもう一度ほどあり、うんざりした彼は一度下水に戻って経験値を稼ぎつつ回復薬も稼ぐという作業に精を出すことにした。

（うわ、植物十五体倒すのと追剥ぎ男五人倒すのと、貰える経験値は一緒で、更に追剥ぎ男の方が金払いいいのかよ。だったら、追剥ぎ男だな…）

そんなことを考えながらげんなりとしつつも追剥ぎ男を追いかけ回し、回復薬も貯まってきたというところで、もう一度遺跡に挑戦することにしたハルは遺跡に向かう道すがら「ピッキングを覚えようか…」と悩んだ。

ピッキングというスキルは「トレジャーインスペクション」というピッキングツールを消費する代わりにかなり解錠成功率を上げることが出来るというスキルだ。「慎重に探る」というスキルと併せると、罠の見定めが出来ていなくても解錠に失敗する確率を減らす事が出来る。シーフ以外の職業でも宝箱の鍵穴を覗き見ることにより、一定確率で罠の解除成功率を上げることが出来るのだが、これは罠の見定めが出来ていても失敗することが多い。事実、敵に囲まれるなどして焦って罠解除を進めようとして失敗する時は大抵この「鍵穴を覗いてみる」という事を行っている時が多かった。

（でもなあ…。ピッキングツール、一つ５００もするんだよなあ…。

死ぬ確率が減るなら、いいかな？でも、中に入ってたモノがショボかったら元は取れないし。どうしようかなあ…）

既に受注可能なクエストの中に、クリア報酬としてこの道具が貰えるというものがあったのを思い出したハルは、とりあえずスキル取得は前向きに考えるとして、今は遺跡の奥へと進むことだけに集中することにした。遺跡の攻略をするにしても、夫婦の依頼を達成するにしても、奥へと進まない事には話にならないのだ。とりあえず極力戦闘を回避しつつ、奥へと進んでみることにしよう。そう思いながら歩を進めていたハルは、魔物を避けて進むことに気を取られ過ぎ、屈めばなんてことはない罠にうっかりと突っ込んでしまった。

（しまった…！）

彼が死を感じたのは、常に注意を払えという姉貴分の言葉が脳裏に浮かぶのと同時だった。なんてことはない罠に引っ掛かって死ぬなんて、気を引き締めていたつもりではいたが若葉マークが外れて浮かれでもしていたのか。とても情けない。そして、ここからでは守護者の像は少し遠い。…もしかしたら、死神が辺りをうろついているかもしれない。

（とりあえず、慎重に戻ろう…）

肉体がないにも関わらず、彼はひどい動悸と吐き気がするのを感

じた。辺りが青白く白んで見え、音のない世界がこんなにも怖いと感じたことはなかった。出来るだけ早く、蘇生してしまいたい。そう思いながら遺跡の入口を目指している途中で、ハルは今まで見たことのないものが遠くにいるのを確認した。フードを目深に被り、鎌を持っている。…死神だった。

（どうしよう…。走り抜ければ捕まらずに行けるかな…。あいつ、動く気配がねえんだけど…）

出会いたくないものに遠目で御対面してしまった恐怖と動揺で思わず足を止め、死神を観察していたのだが、ヤツは一向に動く気配が無かった。そしてそれは、意を決してハルが走り出した瞬間だった。ヤツは待ち構えていたと言わんばかりにいきなり動き出し、目にも止まらぬ速さで鎌を振り上げた。首を傾けて鎌を無情に鎌を振り下ろした骸骨が一瞬視界に入ったかと思うと、ハルは死体のある場所へと戻されていたのだった。

（ああ、嘘だろ…！？魂を刈り取られた…！！）

愕然とした彼はパニックに陥り、焦燥感に駆られて先ほどとは逆である遺跡の奥へと誤って走り出してしまった。生き返れなかったらどうしよう。まだやり残したことはたくさんある。こんなところで消えてなるものか。泣きそうなのを必死で我慢しながら前方に目を向けると、死神のいる場所へと突っ込んでいってしまっていたらしく、少し離れた場所にいた死神が猛スピードで近付いてきた。あまりの速さに避けられる術もなく、気が付くと目の前には骸骨の顔

が間近にあった。

（どうしよう…。また刈り取られた…。これ、生身の状態だったら、腸が捩じ切れそうなくらい辛い…）

悲嘆にくれていても、どうしようもない。なんとか蘇生しなければ。どうしたら一番いいのかを必死で考えていたハルは、ふとあることを思い出した。肉体が身に着けている装備品が劣化する代わりに守護者像へとワープすることが出来る、死んでいる状態でしか使えない魔法があるということを。装備品は遺跡に潜る前に一通り修理に出してあるから多少劣化しても問題はない。それに、仮に装備が壊れてしまっても、命に比べたらそんなのは大したことではない。もう死神に追いかけ回されるのはこりごりだ。その魔法を使ってしまおう。とりあえず、落ち着け。落ち着くんだ。ハルは深呼吸を一度すると、その魔法を思い出し、唱えたのだった。

＊＊＊＊＊

無事に守護者像へと辿り着いても、まだまだ一安心は出来なかった。死神に魂を二度も砕かれてしまったお陰で蘇生成功率が７５％まで落ちていたのだ。回復薬を捧げられる限界まで天秤に捧げてみたものの、９２％までしか成功率を上げることが出来なかった。もうこれ以上は、運に任せるしかない。９０％を超えていても灰になったという人の話を思い出したハルは、喉から心臓が飛び出そうな思いだった。祈る思いでその魂を天に委ねると、馴染みの呪文が辺りにこだまし、再び目を見開いてみると、様々な色で彩られた世界

がそこには広がっていた。…無事に蘇生出来たのだった。

今日体験したこととこの気持ちは絶対に忘れてはいけない。死してもなお油断はするな。最優先事項は「生命」だ。たとえ死んでも、生き返る可能性が万が一にでも残っているうちは死に物狂いで生を掴みに行け。命に勝る宝はないのだから。

ハルは命あることの喜びとありがたみが身に沁みる思いでいっぱいだった。これからも、冒険者を続けていく限りは幾度となく死と隣り合わせとなるだろう。だが、これぱかりは「冒険なんて、そんなもの」で済ましてはならない。生あることを感謝して、日々を大切に送るということも忘れないようにしなければ。ハルは生ある世界へと戻って来られたということを神に感謝すると、街へと戻り、そして下水道へと潜って行ったのだった。

死神との初遭遇（後書き）

９５％でも平気平気と言われましたが、物が減ろうがなんだろうが、灰になる様を見るなんてちょっと、耐えられそうにないです…。ルートなんて知ったことか精神で出来る限り守護者像ワープして、捧げ物もして蘇生しようと思います。……チキンと言われても、私は構わない…！

小噺その５　物色するだけの簡単なお仕事（前書き）

２０１１／１２／０１・０４・０７

ちょっとしたアルバイトしました。

アイテムドロップやミッションについてちょっとネタバレしていますので、気になる方は「回れ右」でお願いします。

小噺その5　物色するだけの簡単なお仕事

【アルバイト1日目】

「ねえ、ハル、お願い！大蔵室に付き合って欲しいんだけど！」

合掌をして頭を深々と下げる姉貴分にハルが「いや、俺、まだそこ行ったことも無いし」と怪訝な顔で断りを入れると、彼女は「攻略進めなくても行けるところだから！お願い！」と涙を浮かべた。

大蔵室というのは、その昔地下水路だったところをどこかの大金持ちが宝物庫として国から買い取ったのはいいものの、無法者の巣窟となってしまいダンジョン化している場所だ。魔法省から調査依頼がなされていたのだが、ハルのレベルや装備では辛いものがあり、まだ足を踏み入れてもいない地だった。

そんな場所に付き合えだなんて。お前、とっくにクリアしてるダンジョンだろ。そんなに行きたきゃ、愛しのカイさんとでも行ってろよ。そんなことを思い浮かべながら、遺跡に行ってくるからということでハルがその場を立ち去ろうとすると姉貴分に腕をわし掴まれ、そして凄まれた。

「盗賊（あんた）じゃなきゃ、駄目って言ってるでしょ。つべこべ言わずに来なさい」

「ちょ、何！俺に何が出来るってんだよ！」

「物色するだけの簡単なお仕事です」

「はあ？」

「デスキャリアーっていう斧持った大男、狂気の木こり男なんか霞むくらいにデッカイ大男がいるんだけどね？そいつが持ってるって噂の盾がどーーーーっしても欲しいの」

「だから、そんなの、カイさんと取りに行けば？俺、まだ戦闘にまともに参加出来ないもん」

「だーかーらー！盗賊じゃなきゃ駄目なんだってば！」

「いや、だから、何で」

「レアドロップなんだもん！私達だけでトライしたんだけど、出なかったんだもん！！」

「はあ、そうですか…」

「戦闘はもちろんお姉ちゃんが全部するから！あんたは頑張って剥ぎ剥ぎしてくれればいいから！」

なんでも、下水道にいた毒ガスの塊みたいなモンスターが今攻略中のダンジョンにたくさんいるそうで、そいつと安全に戦うためにもどうしてもデスキャリアーさんが持っているという盾が欲しいのだという。その盾さえあれば、どんな毒攻撃も受けなくなるらしい。

…それ、いいな。俺も欲しいわ。解錠失敗しても罠が毒針だったら食らわずに済むってことだろ？その「簡単なお仕事」をするために強制的に攻略進めさせられるわけでもなければ戦闘はお任せでいいっていうのなら、いつも色々とお下がりを貰っていることだし手伝ってもいいか。ハルはそう考えて姉貴分の依頼を承諾すると、彼女に「もちろん宝箱も出たらお願いね」と言われたので、ひとつおねだりをした。

「あ、じゃあさ、今とっておいてあるスキルポイントでピッキング覚えるからさ。道具買ってよ」

「え？」

「解錠成功率、上げたいじゃん。爆弾で死ぬとか嫌だし。そのくらい、いいだろ？」

「まあ、お願いしたのは私だし、別にいいけど…」

そう言って姉貴分はひとつ５００もするピッキングツールを十個も買ってくれた。太っ腹過ぎる。彼女は「あんたが遺跡をクリア出来るようになったら、決戦場廻りミッションやろうね。そしたらコレ、報酬で十個貰えるし。とりあえず、大枚叩いて買ってあげたんだから、大切に使いなさいね」と胸を張った。ハルが彼女に感謝の言葉を述べると、早速大蔵室へと向かうこととなったのだった。

＊＊＊＊＊＊

大蔵室に着き、そのデスキャリアーだかというやつがいるところに辿り着くまでに宝箱が出た。姉貴分の言葉を思い出し、どうせ道具を使うならここぞという時に使おうと思ったハルは見定めの手ごたえがあったにも関わらず、罠の爆発に巻き込まれて死亡してしまった。

「えー。爆弾で死にたくないって言った傍から死んでるじゃん」

（お前が「大切にしろ」って言ったから、道具ケチったんだろうが！）

「別に、ケチらなくてもいいのに」

死亡してしまってもパーティーを組んでいると意思疎通が出来るのか、ハルが思わず叫んだことに対して姉貴分は返答を返してきた。

「あんた一人で守護者像まで帰れる？ていうか、帰れてもここまで戻って来れる？」

（地図まだ拾ってないから無理。道分かんない）

「じゃあ、お姉ちゃんが連れていってあげる」

姉貴分はそう言うと不思議な呪文を唱えた。どんなに体格差があっても死体を回収して運べるようになるというものらしい。以前、死神に遭遇した時にも守護者像へと瞬間移動出来るという不思議な呪文にお世話になったのだが、こういう時にも役に立つ呪文がある なんて冒険者は何かと神の加護があるのだなとハルは思った。

不思議な呪文により死体ごと姉貴分に運ばれる道すがら、姉貴分は「ていうか。久々のお姉ちゃんはどうよ？」とニヤニヤとした笑顔を浮かべながら話しかけてきた。蘇生をした後で運んでくれたお礼をしつつ「え？南瓜。すごい南瓜」と答えると、彼女は頬を膨らませた。

「南瓜って、何」

「え？見たまんまだけど。今日も相変わらず南瓜被ってんなあって。ホント、南瓜好きだよね、お前」

「あっそう…」

そんな会話をしながら歩を進めていると、大男のいるところに辿り着く前にまた宝箱が出た。今度はピッキングツールを使おう。そう思い、見定めをし、ツールも使ってかなりいい感じの手ごたえがあったのだが、最後のひと押しで見定めをしている途中で罠が作動した。罠は毒針だった。罠の毒は地味に響く。早く自分も噂の盾が欲しいと思いつつ宝箱の中を覗いてみると、なんと空だった。

「あああ！今度はケチらず使ったのに！毒食らった上に空とか！」

「まあ、よくあることだよね」

「そうだけどさ。もうちょいで大男のいるところ、着くの？」

「うみゅ」

ハルの質問にそのように答えながらコクリと頷く姉貴分に、彼は心の中で「え…、何、「うみゅ」って…」と呟きながら頬をひきつらせた。どうやら本人は可愛いと思ってそのような言動をとっているらしかった。昔はこんな言動をとることなんてなかったのにと思いながら彼が思わず身を後ろに引くと、彼女はまたもや「うみゅ？」と言いながら小首を傾げた。

（ちょっと待て。その「うみゅ」って何だ。可愛いと思っているのか？正直、怖えよ！え、マジで何？カイさんの趣味！？）

ぞぞけ立つのを感じながら姉貴分の後ろをついて歩いて行くと、前方にとても大きな男が立っていた。以前、下水道にて最終決戦として戦った盗賊団の団員の一人と同じくらいの大きさか。

「じゃあ、ハルは倒すまで後ろで待っててねー」

そう言われて「物色するだけの簡単なお仕事」は開始したのだが、

これが結構いい経験値と金稼ぎとなった。ただ、戦闘が終わるまでの間、待機しているだけというのは手持無沙汰で仕方がない。なので、スティールという「まだ息絶えていないモンスターから物を盗む」というスキルを覚えていたので、それを試す事とした。しかし、盗めたものは宝箱の鍵の材料となるというキラキラと光る石だけだった。

「中々、出ないねえ。ちなみに、何盗めた？」

「石…」

「うわ、ショボい」

そんな会話をしながら「お仕事」を続けていた時だった。姉貴分の方を向いていた大男が急にこちらを振り向き、頭をわし掴んで来たのだった。そして、ハルが身体を動かせずに半ばパニックになっていた時だった。世界が青白く白み、姉貴分が例の不思議な呪文を唱えるのが聞こえてきたと同時に「グロい」と呟いたのだった。

（え、何。何が起きたの？ていうか、グロいって？）

「あんた今、真っ二つ」

（えええええ！？）

守護者像前で下ろされ、足元に転がっている自分の身体を見たハ

ルは再度顔を青ざめさせた。確かに、見事に腰を境に真っ二つとなっている。死ぬのだって気分悪いのに、真っ二つとは…。これは、ちゃんと蘇生した時に元通りになっているのだろうか。いや、元通りになっていてくれなければ意味がない。

冷や冷やとしながら天秤に捧げ物をして生き返ると、ハルはしっかりとくっついている胴体を涙目で擦りまわした。よかった、くっついている…。

結局、この日は合計で二時間かかったが、なんとか最後の方で件の盾を手にすることが出来た。彼女達が盗賊職抜きで挑んだ時は、二時間かけても出なかったそうで、姉貴分は大層喜んでいた。恐怖の初体験をしもしたが、彼女が喜んでいるならいいとしよう。

ちなみに、彼女がダンジョンから立ち去る前に宝箱が出現し、開けておいてねと言われたのだが、道具をケチろうとしてゆっくりと解錠作業を行っていたら宝箱が消えてなくなってしまい、盗賊として情けない初体験もしたというのは、姉貴分には秘密である。

＊＊＊＊＊＊

【アルバイト2日目】

それから数日後の遺跡をクリアして少ししした頃。再び姉貴分と一緒に例の盾を求めて大蔵室に篭ることとなった。毒ガスのモンスタ

ーに手痛くやられているらしく、出来ることならパーティー分集めたいのだという。しかも、今回は天の恵みがあり、レアアイテムのドロップ率が上がったらしい。だから、前回よりも出やすいのではないかということだった。

「お仕事」を開始して十分。盾はあっさりと出た。「今出た盾はあんたが貰っていいよ」と言われたので、ハルはありがたく頂戴することにした。その後カイさんもパーティーに参加して「お仕事」を続行したのだが、この日の分のハルの運は営業を終了してしまったらしく、お仕事終了と相成った。出来ることならカイさんの分もゲットしたかったと思いながらハルがうなだれていると、カイさんは「また今度でいいよ」と笑いながら「折角だし、少しここの攻略、する？」と提案してくれた。それについては、遺跡探索についての話を語ってから、また後日語るとしよう。

＊＊＊＊＊＊

【アルバイト3日目】

それから更に数日後。今度はリリアが「毒盾欲しい」と言っていたので「剥ぎ専で良ければ付き合うよ。この前、ものの十分で出た」と声をかけた。すると、是非ともお願いしますという返事と共にパーティー申請書が送られてきた。早速リリアと、ユニオン員で戦士のツァークと一緒に大蔵室へと向かったのだが。なんと、最初に出会った大男からあっさりと盾を頂戴することが出来たのだった。これにはリリアも驚いていて、「一体何百体倒したことやら…」と呟

いていた。

この後、謎の男五人組が統べる塔が出現したという噂を聞いて、そちらに行ってみようということになり、前日にリリアと姉貴分とで挑戦した時には出づらかったという必要アイテムの「赤い欠片」というのも、ハルが参加していたからかボロボロと出た。それを見ていたリリアから「ドロップの神様」と言われたのは、また別のお話。

それにしても。実は以前、折角だからみんなでどこか行こうよということになった際に盗賊のソニアも来ると言われ、「自分よりも高レベルのシーフが来るなら、俺、やること全くないじゃん。役立てない上に寄生しか出来ないなんて、情けないし申し訳ねえよ」と落ち込んだことがあったのだが。こうやって誰かの役に立てるのは嬉しい。そして、みんなの笑顔を見ることが出来るのも。

（もっと、トレジャーハンターとしての腕、頑張って磨こう）

綺麗な宝石よりも、希少価値の高いお宝よりも。仲間の笑顔というのは何倍もの価値があり、そして換え難いものだ。それを得続けるためなら。少しずつだけど、頑張って前に進み続けよう。

ハルはその思いを胸に、今日も遺跡で経験値を稼ぐのだった。

小噺その５　物色するだけの簡単なお仕事（後書き）

最近、盗賊として活躍できるようになってきました。
ちょっと、嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8943y/

冒険者かく語りき　～トレジャーハンター修行中～

2011年12月10日03時02分発行